

謹賀新年



昭和55年元旦

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

洛友会役員

- | | |
|--------|---------|
| 会 長 | 松田長三郎 |
| 副 会 長 | 芦原 義重 |
| 〃 | 巽 良知 |
| 〃 | 本多 静雄 |
| 〃 | (中部支部長) |
| 〃 | 宮田 秀介 |
| 〃 | (九州支部長) |
| 〃 | 真田 安夫 |
| 〃 | (中国支部長) |
| 〃 | 金井久兵衛 |
| 〃 | 大谷 泰之 |
| 〃 | 上之園親佐 |
| 東京支部長 | 相木 一男 |
| 関西支部長 | 大森 武司 |
| 東北支部長 | 二村 忠元 |
| 北陸支部長 | 荒井 武治 |
| 四国支部長 | 藤本 悟郎 |
| 北海道支部長 | 池内 義則 |
| 〃 | 山本 茂雄 |
| 〃 | 吉田 洪二 |
| 〃 | 近藤 文治 |

京都大学

電気関係教室

教官一同

関西電力株式会社

大阪変圧器株式会社


財団法人 関西電気
保安協会

近畿電気工事株式会社

近畿日本鉄道株式会社

栗原産業株式会社

京阪電気鉄道株式会社


三洋電機株式会社
日立製作所

株式会社
シンコーメタリコン
代表取締役 立石 亨三

大和電機株式会社

立石電機株式会社

株式会社 電気評論社

東京芝浦電気株式会社

特殊電機株式会社
取締役社長 北野 山人

取締役社長 十倉 正三

代表取締役 立石 孝雄

謹賀新年

昭和55年元旦

フジテック株式会社

日新電機株式会社

ダイキン工業株式会社

株式会社 島津製作所
取締役社長 上西 亮二

シャープ株式会社

松下電子工業株式会社
社長 三由 清二
大阪府高槻市幸町一番一号

松下電器産業株式会社
電機製品開発センター
所長 片鎌 秀雄

中国電力株式会社

日立化成工業株式会社
取締役社長 高木 正

高周波熱錬株式会社

株式会社 日立製作所
関西支店
理事 支店長 加納 忠勝

三菱電機株式会社
大阪営業所
取締役所長 中谷 義也

日本電子開発株式会社

株式会社 電子開発学園

四電産業株式会社
相談役 渡部 兼雄

株式会社 日立製作所
四国支店
〒760高松市亀井町7番地
電話(087)313132

四電エンジニアリング株式会社
取締役社長 徳岡 毅

田辺商事株式会社
代表取締役 田辺 輝雄

北陸電気工業株式会社

北陸電力株式会社

北陸電話工事株式会社

日比谷総合設備株式会社

年頭に際して

洛友会会長 松田長三郎

新年お目出とうございます。年頭にあたり、会員各位のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

□ 京都大学は明治三〇年に、京都帝国大学として、土木・機械の二工学科よりなる理工科大学として開設されましたが、電気工学科は一年遅れて明治三十一年に創設されました。前の二科は日露戦後、国力はまだ恢復していなかったのに、教室は木造でありましたが、電気教室が初めて英国から輸入のレンガ造りの立派な教室ができたので、これが、今、現存している京大最古の建物であり、今回の改装に当たっても、この正面は永く保存されることになっていきます。当教室からは、現在まで四九二五名の卒業生を出していますが、これに、講習所の卒業生一二七八名を加えると、実に六〇〇〇名を超える多数の電気工学専門の人材を社会に送り出したことになり、我国の電気文化の華咲く現在に至るまで、斯界の発展、国力・文化の発展に活躍し貢献して来られたことと、ひそかに誇りとするとともに感謝と敬意を表するものであります。

す。

□ 電気関係各教室のことについては、随時、報告されていますから、この際母体である京都大学の全貌を知って貰うことも良からうと思ひ、近着の「京都大学概要」に因り、その一部を摘記しますと、上述のように、京大は明治三〇年最初は、理工科大学として、土木・機械の二学科で発足し、翌年、電気工学科、三二年に法科大学、医科大学、三九九年に文科大学、大正三年には理工科大学が、理科・工科の二分科大学に分離、更に大正八年には、各分科大学を学部と改称、同年経済学部、一二年農学部、昭和二四年教育学部、三五年薬学部が夫々新設せられ、これで九学部となり、これに二三の研究所等及び医療技術短期大学を含めて、京都大学は東の東京大学と共に、国立大学としての東西の双璧と云える。

□ その陳容は第一・第二表に示すように、教授六三〇名、助教教授五九六名、講師一三一名、その他を併せて、教職員総数五七五八に及ぶ大世帯の我国の誇る学術の府

第一表 京大教職員数

職別	文	教	法	経	理	医	附病	薬	工	農	教養部	計
教授	31	11	28	14	69	36	2	13	143	58	77	630
助教授	25	7	11	13	57	39	6	13	122	57	100	596
講師	—	—	—	—	19	19	43	1	18	12	1	131
助手	31	6	8	2	140	80	92	28	287	111	24	1,156
その他職員	46	17	39	28	165	75	971	29	384	146	96	3,244
計	129	41	84	57	450	249	1,114	84	954	384	298	5,758

である。この年間の経費は昭和五三年度の決算額は、五一五億(内人件費二五四億円、物件費二六一

別に医療技術短期大学部あり

外に総長1人

第二表 学生数・卒業生・大学院修了者数

学部	入学定員	学生数 (54年7月)		学部卒業生数		大学院(各研究科)修了者数		
		学部	大学院	53年度	累計	修士課程		博士課程 54.7.1.現在
						53年度	累計	
文	200	1,118	394	195	9,234	80	1,806	18
教	50	254	108	60	1,185	18	380	5
法	330	1,732	70	363	22,720	7	310	5
経	200	860	92	178	13,853	14	259	4
理	281	1,325	561	249	7,872	112	2,356	575
医	120	752	201	120	8,449	—	—	532
薬	80	322	101	81	1,260	28	531	178
工	945	3,984	1,353	973	26,209	551	7,927	612
農	300	1,246	444	292	8,629	106	1,906	301
計	2,506	11,598	3,324	2,511	99,411	916	15,475	2,230

億円(臨時部を含む)である。この表でも明らかのように、工学部が断然ズバ抜けて大きい。従って学生数も、卒業生数も非常に多いが、これらが我国の経済大国に押し上げた大きな原動力にもなっていることは確かである。嘗て筆者が学生時代、恩師青柳栄司先生は、ドイツでは自然科学系と人文科学系の学生数が七対三位である

に反し、我国ではこの逆である。これからは、口の人よりも、手の人が増えねばならぬと云っておられたが、今や正にそういう時代になって来たのである。創立以来、これまで京大は、一〇万を超える卒業生を輩出し国運の隆昌・文運の興隆に大きく寄与貢献して来たのである。

医	804
専	937
理	
工	
学	
大	
計	101,152

□ 昨年の「京大広報」に、私は「戦後、我国の驚異的發展は科学技術に負う所が甚だ大である。勿論、人文・社会科学との併進が一層大切であるが、科学・技術は益々拡大・深化して行く。この趨勢に応ずるための人材の養成には、大学院及び研究所の拡充強化が肝要である。二一世紀は日本の世紀と期待されているが、経済においては、既に世界の中心となつてゐるが、来世紀には我国が世界の尊敬を受けるような学術文化の大国となり、本学も亦、世界での重要なその一中心であるよう、碩学英才を擁する本学の教官学生の皆さんにお願したい。」と書いたことがあるが、本学の卒業生でおられる皆さんに、「視野は広く、研究は深く」と、同様のことをお願いしたいと思う。

□ 本年は一九八〇年代の初頭であり、二一世紀の夜明け前であり、一九五〇年代、一九六〇年代は、我国にとつては未曾有の経済的發展を遂げた希望と光明に満ちた時代でありました。一九七〇年代は、我国のみならず世界にとつても容易ならざる一〇年でありましたが、来るべき一〇年は、前期に増して一層混沌として不安定・不確定であるように思はれます。一九七三年の石油ショック以

来、我国は勿論、世界全体が石油に引き廻わされて来ました。一躍四倍にも狂騰した原油の値上げによつて、世界中に大きな経済的混乱を引き起こしたが、更に昨年中には、数回に及ぶ相次ぐ値上げによつて、我国の如き九〇%以上を輸入に依存している国では、その蒙る影響は甚大であり、電力・ガス事業は元より、各種の輸送機関を初め石油を使用するあらゆる方面に非常な影響を及ぼしている。殊に、旧臘ベネズエラの首都カラカスで開催された OPEC 加盟一三ヶ国の石油主脳会議では、結局、穏健派と強硬派との合意が見られず、従来は統一行動をとつていた原油の上限価格の一致を見ることができなかつたために、今度は、OPEC 加盟の産油国は各自でんでに勝手な値段で売り出すこととなり、既に一バレル三〇ドルと云い出した国もあり、我国はその価格において、又輸入量において、正に脅威的な不安に曝されている。この石油危機に直面して、背に腹は変えられず、逸早くイランから買い付けると、米国ににらまれて総理大臣初め、特派使節まで平心低頭陳謝するといふ情け無い状態に立ち到つて、我国は両国の板ばさみになつて実に苦しい状態に立たされている。資源の無い国のみじめさを、やと云う程嘗め

さされた歳末であつた。石油の値上りは、あらゆる方面に軒並みに波及して、電力料金なども本年は、大幅な料金値上げにならざるを得ない窮状に追い込まれている。電力会社は、その上、原子力発電初め、各発電所の立地条件に悩まされているが、このままで行けば早晚電力事情が行き詰りになることは必至である。さればこそ政府を初め電力会社は省エネ・節エネに大わらはで七%の節約を標ぼうしているが強制的ではない。

□ 省エネと云えば、随分無駄を省いていることも多いと思はれる。例へば車窓に見る農村のビニールハウス栽培風景である。例へば、南国土佐では、今西瓜のハウス栽培が行はれているし、到る所でイチゴやその他の野菜類に至るまで、季節を問はず、年中食べられる状態であるが、これにも多量の油が使用されている。油が不自由になれば、これらを禁止或は規制する対策が必要なのではないか。凡て作物は、天然の所謂「シェン」ものが一番美味であり天理に叶つている。燦々と降りそそぐ折角の太陽を遮断していることは、何とも惜しい気がするが、農家にしてみれば猫の眼のように変る減反政策のために、何等か有利の作物を

□ また、代替エネルギーに対する官民各方面の研究は或る程度進んで来てはいるが、焦眉の急の間合に合わぬ。代替エネルギー公団の新設の儀も拾頭して来てはいるが、国家財政必逼の五五年度政府予算案で、取り上げられるか否か、頗るあやしい。長い懸案でもある石炭液化の研究も今回、日・米・西独の三ヶ国が協同して、日産六〇〇〇トンの実証プラント建設等を考慮した官民協同のナショナル・プロジェクトを、総合エネルギー調査会の分科会から提言されているが、我国は米国や西独に比して国内石炭は乏しい。

□ その他の代替エネルギーの研究も何れも、比較的小規模のものが多く逐年急増している電力需要を賄えるものではない。差し当つては、やはり問題はありますが、原発にたよらざるを得ないではないか。勿論これには安全性の確保が第一であり、一般住民の了解を得ることが肝要である。ソ連では米スリールマイル原発事故報告書を検討の結果、その推進に踏み切つたと伝えられている一方、米国では、耐震設計にミスがあつたとかで、米原子力規制委員会では全原発の

見直しを要請したとか伝えられているが、いづれにしても地震国日本では、勿論初めからこういう点には抜かりは無からうけれども、一層注意をする必要がある。

□ 昨年末の或る日曜日、京都のデパートは、人の波でゴツガがえし、計五〇万人の出入りがあり、売り上げ総計二六億であつたと新聞は報道していたが、何とも物凄すごい景気であつたようであるが、各地でも同様であつたであろうし、どこに不景気があるかと疑われる程である。また、年末には、海外への旅行者は一六万人にのぼり、スイスやカナダなどヘスキーに出かける人、或は南極への遊覧飛行に出かける人など、十年前には考えられなかつたようなことが、今や日常茶飯事のようなことになつて来た。こういうことは一部の現象ではあるが、数百万・数千円もする宝石類が、いともたやすく買はれている階層もあるが、以前は社会に対する遠慮もあつたが今は何をしても、何を言つても一切自由である我国の如き所は、世界でも稀なものでは無いかと思う。或る程度の自制なり歯止めが必要である。

□ 世は様々で好況を謳歌する向きもあれば、不景気をかこつ向き

もある。不景気と云へば、相変らず倒産する会社も多い。最近、松下幸之助さんが、アメリカ銀行のランドボルク会長との対談で、氏は「米国では毎年一五〇万の新規事業が発足し、四〇万が姿を消す。二年間に二五％、五年以内に六二％が閉鎖を余儀なくされている。成功の絶頂を極めたフォード自動車会社でさえ、創立者（ヘンリー・フォード）が現役中に、大災害にも近い危機を招いている。彼は自動車生産にベルトコンベア・ラインと云う画期的な方式を取り入れたが、これ以上の革新は必要ないと頑固一徹になっていった」と云っている（週刊朝日）。自信が無ければならぬが、やはり余り自信過剰でも困る。社会の進運や時代の要求を先取することが肝要である。国もそうであるが、会社も亦然りで優勝劣敗は、いつの世にも変りは無きそ

ある。

□ これからは国家間は勿論、企業間でも、その対立は残念ながら益々激しくなっていくように思われる。自衛のためにも、より豊かな、より自由な、より高度の社会生活のためにも更には、世界人類の幸福と繁栄と平和という崇高な悲願のためにも、科学技術の発達には必要である。これを悪用させなければ、科学技術の発達により国家は繁栄し、人類の文化・文明の興隆に寄与することは大きいと思はれる。これからの技術革新に対応し、推進して行くための研究者・技術者の責務は大きい。

□ 雑ばくなことを思いつくままに書き記しました。終りに臨み、重ねて会員各位のご健康とご清福をお祈り申し上げます。

甲子会の集い

世話人 大正13年卒

芦原 義重
菊池 保夫
本多 静雄

「卒業五十五周年記」

我々、大正十三年卒業の同級生は、それから今年で、五十五周年になる。丁度、その年が千支で甲子であったので、甲子会と名を付

けた。多分その年に、甲子園球場が出来たと思うが、それが頭にあつたかも知れない。卒業後半世紀と一割も超して仕舞い、卒業生は皆んな八十才前後の老爺になつ

た。

そこで、今年は久し振りで寄合はねばと思っていると、同級生の関西電力の芦原義重君から、名古屋の本多静雄君のところへ「今年一つ名古屋で甲子会をやらぬか」と言う電話がかかった。国鉄のOBで常々甲子会の世話をしてゐる菊池保夫君と相談してやってくれと言う事だったので、私は大喜びでそれを引き受けて、菊池君と名古屋在住の河津吉兵衛君などと相談して、五十四年の十月四日・五日の両日名古屋で開催した。

改めて同級の卒業生名簿を見直して見た。私達が入った年から電気科の定員が増えて、五十名になったのだが、それが上から下つたり下へ残つたりしてその当時から私達が同級として、おつき合しているのが大体四十人ある。それが昨年までは、大体半分生き残つており、生存が二十二、死亡が十八人だったが、今年になって、ばたばたと三人欠けた。寂しい事だ。

それは、田中通雄、永井徐二郎、それから十月の会合の直前に欠けた浜田市に在住の俵三九郎君の三人だ。この頃の自民党と同じで過半数を割ってしまった。従つて現在十九人と言う事になる。その内の十一人が今回の会合に集ま

り、残り八人は体が悪かったり、不得止ない事情があつて欠席になつたが、奥さん同伴が五人あり、数だけは十六人となつた。あとで、名古屋の八勝館の席上で、卒業記念アルバムを皆んなでめく

つてみたが、懐かしい人の顔がいっぱい並んでいた。当時の総長は荒木寅三郎さん、電気科の科長は青柳栄司さん、今の人達から見れば、歴史上の人物に見えるかも知れない。教授陣は、本野亭先生、清水義一先生で、岡本赴先生や鳥養利三郎先生は私達の入学した時はまだ助教である。加藤信義先生は講師であつたが、卒業時には助教になつておられる。皆んな若かつたがもう故人ばかりである。当時授業を受けた先生方は全部なくなつた。

当日寄せ書きを忘れたので、その代わりとしてここに当日出席した、同級生の名前を列記して見

る。

- 第五十五回甲子会出席者 十一名
- 芦原 義重、岡田 邦彦
- 尾崎坊義信、河津吉兵衛
- 渋谷 励三、高島 正一
- 高田 豊、堀川 栄治
- 三浦 倫義、菊池 保夫
- 本多 静雄
- 同上欠席者 八名
- 高田大三郎、巽 良知
- 中沢幸次郎、中村 喜一

西 兼通、村上 竹夫

吉田吉三郎、弓削 正人
前に戻つて、五十五周年甲子会は、名古屋の駅前の都ホテルに四日の午後二時までに、出席通知者は全部皆んな集まつた。しばらく見ないうちにいづれも老人化しており、ちよつとみただけでは、誰だか解からないぐらいになつてゐる人もあつたが、顔をよくみてみると、大学時代の面影が、どこかに潜んでいて、思わずその人の名前が無意識に浮ぶ、自信のないままで、その名前を言うと相手の方が「こりして「そうだ」といつて呼んだ方の名前を呼び返してくれる。何とも言えない懐しさであつた。

都ホテルから車を連れて、私の郷里の豊田市の平戸橋と言うところへ案内した。私の家では、庭前で野立てをやつて抹茶のご接待をして、私の持っている陶器、古瀬戸、渥美、常滑、信楽、古越前など数百点をみせた。更に、豊田市が今度矢作川の平戸橋河畔につくつてくれた、猿投古窯本多記念館へ案内した。

そこには、猿投古窯からの発掘された陶片を、数百点を並べてある。

猿投古窯と言うのは、私の家の裏にそびえている六百米の猿投山の西南麓に、平安朝時代の須恵器

というやきものの窯のことである。それが、従来余り世人の注意を引かなかつたのであるが、昭和二十九年に私達がその破片を拾い上げたことから、平安期のものであると日本の陶磁学界に報告したのである。それから、騒ぎが大きくなり県や国が補助して発掘を三年程続けて、戦後の大きな発掘事業の一つとなったもので、窯跡は須恵器が約四百ヶ所、山茶碗窯が千ヶ所近くあった。これで、平安朝時代の日本のやきものの全貌が明らかになる切掛となった。

従来延喜式などで名前は判っていても、実物がはつきりしなかつたのが判明し、それが何処で焼かれたかも次第に、はつきりしてきたのであった。そして、私のところ破片だけなら五万点、発掘を主催した名古屋大学には、百万点の破片が集まった。少し自慢話になつて恐縮だが、私が同級生を引張つて来たのは、これが見て貰ひたかつたのである。

そこで猿投の地元の作家、山田和俊氏と瀬戸の作家、加藤清氏の窯から素焼の皿や茶碗を持って来てもらい、それに皆んなで絵付をした。後でこれを、焼上げて皆んなに送るといふ趣向である。それをすまして名古屋へ引返し、名古屋市の東の方の名園で有名な八勝館へ着いた。そこで六時から宴会を始めたのであるが、八勝館ではまず、菊池君が欠席者の消息を披露し、次に芦原義重君が七宝の捧ネクタイを皆んな一つづつ記念品として贈つた。皆んな大喜びであつた。欠席者には、後から全部送ることにした。更に、宴会の趣向として八十の爺父が芸者を大勢入れて、ドンチャン騒ぎをしてつまらないし八勝館の慣れた女中さん達の取持方が良いと考えたが、何も催しものがないのも淋しいので、博多の筑前琵琶の師匠、嶺旭蝶とその御弟子さんが来名してしたので演奏してもらつた。

その題名は、「天草の麦」という新作で原作は私が作り角屋寿吉さんが作曲したものである。その題材は、私の郷里に関係ありその風土・人情を理解して貰うのによいと考えたからである。それは、江戸初期の天草の乱の後、見込まれて天草代官となつた、鈴木九郎重成といふ旗本の物語である。重成は私の家から三里程東の方の巴川筋の則定といふ部落の出身で有名な禅僧鈴木正三の弟である。

重成が代官として天草へ来て仔細に土地を檢分したが知行四万二千石では、荒廢の後の島民は飢死してしまつて、幕府に向かつて禄高の減免を申し出たが幕府が許さない。真情一徹の三河の武士らしく建白書を呈して切腹して

しまつた。これに驚いて幕府は知行を半減した。これには、天草の島民が驚くと共に感泣して、天草の本渡に鈴木神社を建立し今も残つている。その物語を筑前琵琶で、本場の福岡からきて演奏してもらつた。少し長いが記念のためその全部を収録しておく。

天草の麦

夜空を焦す篝火に
哀しくゆらぐクルスの旗
こゝ島原の原の城
籠成既でに四日月
矢玉も尽きて食もなく
いざ天国へ旅立たん
盟主四郎をとり囲み
祈りの声も高なるや
戦すんで天草へ
代官として来りしは
鈴木三郎九郎重成とて
三河の国は則定の
徳川譜代の旗本なり
島に渡りて見たせば
詩吟

国破山河在 城春草木深
田畑は荒れて船は朽ち
草に隠れしあばら家に
住む人とても疎つなり
重成つらつら思うよう
戦に勝ちし我なれど
人なき糧なきしこの島に
代官何を為すべきか
これ島人よよく聞けよ
我この島にあるからは

もはや兵火は二度となし
島人日日をむつみあい
必ず生計の出来るよう
力の限り尽すべし
説いて廻れど島人は
隠れキリシタンの根は深く
いづれ召されて天国へ
幸せの日をば待つ身なり
御慈悲無用と戸を閉じぬ
こゝに重成は全島の
田地田畑檢地して
その少なきに驚きぬ
江戸にて決めて録高は
戦の前のその儘に
四万二千石なり
いま出来高をみてあれば
その半ばにも満たざりき
かくてはならじ幕閣に
録高減免ならざれば
島民すべて飢死せん
決意も固く江戸へ出て
幕閣要人前にして
荒廢破弊の有様を
言葉を尽くして訴えけるも
減免は天下の大事
前例なしの一言に
今は詮無く重成は
我身の誠足らざるか
千代田の城を振りかえり
神君家康世にまさば
我が懸命のこの願い
必らず許し賜うべし
無念の涙はらはらと
時は 心三年秋

雁渡る西の空
建白の書を前に置き
腹かき切つてぞ伏せにける
幕閣一同驚きて
かゝる大事のことなるか
死諫空しくすべからず
まさに訴願を容るべしと
録高半減を沙汰したり
島民これを伝え聞き
かほど我等の生計を
案じて呉れし武士はなし
前代未聞の代官よ
一粒の麦
地に落ちて死なずば
ただ一つにてあらん
若し死なば多くの
実を結ぶべし
と聖書の言葉そのままに
これぞ誠の護り神
いつの世までもその遺徳
伝えんものと本渡の地
鈴木神社を建立し
今も高鳴る神楽の音
詣でる人の絶間なし
余興はそれだけで、後はめいめいの話がはずんだのである。

あくる四日は、皆んなで明治村へ行った。老人ばかりなので明治村の好意で、場内では一般には乗物は許さないが特に巡回車を三台を提供してもらい、正午まで邸内をくまなく廻つて特に興味のあるところだけ降りて見た。明治村は必ずしも館内の展示が問題ではな

く、建築物が主であるので、中へ入らなければならぬことはない。一巡後皆んな一緒に昼飯を食べたいのと、また車を連ねて名古屋の都ホテルに引近し、そこで解散した。

な会をやることとするが、もう五年たつと再び甲子の歳が巡って来る。そのときは、京都が盛大にやるう、それまではお互い体を大切にしようと言いつけて別れた。
一九七九・一二・一
(本多静雄手記)

若い世代からの参加を

昭和13年卒
関西支部長 大森 武

新年明けましてお目出とうございます。
会員のみなさんには、よい年を迎えられたことを喜び申し上げます。

洛友会も年々会員数がふえ、ますます発展しており、まことに心同慶に堪えない次第であります。関西支部では現在二千名近くの会員を擁しておりますが、従来より会員相互の親睦を図っていくために、いろいろの行事が企画され、

総会をはじめとし家族見学会や囲碁、将棋、麻雀、ゴルフの大会なども実施いたしております。

なかでも家族見学会は会員ならびにご家族の方々も含めて親睦を新たにするとともに、健康の増進もかねて行なわれるものであります。毎年秋の一日バスを教台借り切り名所旧蹟あるいは最新の電力施設など見学させていただいて

おられます。昨年十一月十一日(日)播州路に道を通り清水寺と姫路城を訪ねました。当日の模様については別途報告しておりますので、ここでは割愛いたしますが、大正初期からごく最近の年度の卒業生まで実に広い年代の方々にご参加いただき、お互いに久し振りの再会を喜び、旧交をあたためておられました。

すでに申し述べましたとおり、洛友会は会員数約六千二百名に達する大集団であります。京都大学の電気関係教室とともに学んだ卒業生が年代を超えて交流を深め団結し励まし合っており、姿は、他に類を見ないものではないかと存じます。この様に貴重な存在である洛友会が今後ますます充実し発展を遂げますことを願っています。

向として若い年令層の諸君からの参加が、やゝ少ないようであります。若い会員諸君にとつては同窓会を身近かなものとして感じておられないかも知れませんが、年代を超えた同学の志の集いである洛

随想

四国支部
14年卒 田中哲郎

友会の事には、とくに新しい年代の方々にせいぜい沢山参加していただき、会員相互の親睦の実を一層大きくしていきたいものだと願っております。

四国支部の会員になってまだ一年にも満たない私に、どういふわけか支部原稿のおはちが廻ってきた。私は昨年四月から香川県多度津の西方にある託電波高専の校長として来ているが、京大での定年を待たずにこちらへ転任して来たのは、まことに不思議な縁によるものである。前校長石黒先生が私を後任に推薦して下さったからであるが、実際上の橋渡しをしてくれたのは、今は亡き同級生の原田尚文大兄であった。それも私が自発的に動いたのではなく、目に見えない糸で引張られるような気持ちで海を渡ってしまったのであるが、私の転任、退官の行事などがすべて済んだあと、原田大兄は急病にたおれられ、そのまま回復されることなく永眠されたのである。

活が出来るとはほんとに有難いことであり、簡素ではあるが、健康的で充実した毎日を過ごさせて貰っているわけである。

京都からこの学校まで片道約四時間半かかる。週末は京都で過ごすことにしているが、往復に少し時間がかかり過ぎるのが欠点といえはいい。京都―岡山間が一時間半で行けるのに、岡山―高松間に二時間もかかるのである。本四連絡橋の児島―坂出ルートも昨春から着工されており、これが完成すると一時間半も短縮されることになるが、私が四国に居る間には完成しそうなない。また連絡橋が完成すると四国は夢の国ではなくなるだろうし、四国のよいところも次第に失われてゆくに違いない。しかしいまのところは漱石の「坊ちゃん」や獅子文六の「てんやわんや」などに描かれている趣きがかかり残されているように見える。浦島太郎になったような気持ちで、四国に住んでいる間にその良さを充分味わっておきたいと思っている次第である。



歳末 雑感

昭和55年卒
九州支部副支部長
河本 勝 寿

九州支部の近況を報告するのが本筋なのですが宮田支部長が入院加療中なので私が代筆します。九州洛友会の大恩人でかけがえのない宮田さんが病に倒れたのは実に残念です。私は兼ねがね宮田支部長がやめられるときは私も副支部長をやめて若手にやって貰うと宮田さんにも会員にも申ししていたのですが、今となってはどうすることも出来なくなりました。宮田さんの最近の状態は片足切断、意識の方もあまりはつきりしない

日が多いとのこと。宮田さんは、五四年九月から福岡市郊外のシーサイド病院に移られ完全看護をうけていられます。宮田さんと数々の楽しい思い出がある私は洛友会九州支部の大恩人である宮田さん御夫婦を些少年らお慰めしたいと思って今日此の頃を過している次第です。

以上のような理由で九州支部の活動は近年余りパットしません。何卒御了承下さい。

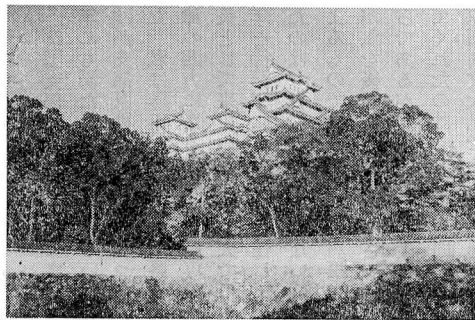
関西支部家族見学会

さる十一月十一日(日) 関西支部では恒例の家族見学会を行ない、秋の播州路に清水寺と姫路城を訪ねた。

前日に激しい雨を降らせた雨雲は東方へ去り、ようやく青空が見え始めたこともあって、朝早くより参加者が続々とつめかけられ、久しぶりの再会に挨拶の声もはずんでいた。

今回も集合地を大阪と京都に分けて合計五台のバスに分乗して出かけたが、途中車の量が少なく快調に走り続けることができて、標

と会食・懇談に移った。そのなかで高木先生からは掛図を用いて電気教室の改築工事の概要が紹介された。最後に「洛友会の歌」を作詞・作曲者である松田会長にご指導をいただき唱和した。



今年私は暖かかったため紅葉が遅いといわれていたが、清水寺と塩田温泉の紅葉は印象に残るものがあった。

むことが出来、今後ともこの見学会を盛んにしていきたいものと思

研究室紹介

電気回路網学講座

電気回路網学講座は、昭和三十六年四月、電気工学第二学科の創設のとき出来た比較的新しい講座で、林重憲教授が昭和四十二年三月定年退官まで担当し、同年四月、木嶋教授が電力系統構成学講座(現在の電力系統工学講座)より移籍、担当することになり、現在に至っている。講座の構成教官は、小沢助教、市川助手、奥村助手併せて四名である。

本講座において研究、教育を行っている電気回路網学は、周知のように電気、電子工学の基礎分野に属し、永い歴史をもつものであるが、最近では、集積回路および論理装置の発展、機器システムの機能の高度化と大規模化、システム理論との関連、計算機利用の常態化などに呼応して進展している。電気現象、工学システムなどの抽象的(数理的)な把握としての回路モデル、ネットワーク・モデルは構成素子の数がふえる(多次元化)とともに多様化した(不連続性・非線形性など)ものになり、

回路網学は古典的なものからの脱脚が要望されている。実際問題の解決のため、現象、システムを数値モデルに抽象化するということが容易でない場合が多いが、本講座では、より良い近似モデルの作成とその定式化、電気現象の解明、工学システムの設計のために有用な解析法とアルゴリズムの開発をめざして研究、教育を行っている。取扱う問題の性格上、手段として数学を使うことが多いが、工学と数学との目的意識や評価基準には、多少のずれがあること、本講座が電気系学科に開設されたものであることを充分認識し、その特徴をいかすよう努めている。

現在、行っている研究の概要は、次の通りである。

一、器路解析の基礎研究

電気回路などの解析において、回路モデルの定式化とその数値解析が重要となる。林重憲教授が提唱された電気回路の基準方程式は、ダイナミカル・システムの厳密な解析法として、広く用いら

(八田記)

れている状態方程式の原型をなすものであり、また、微分方程式論における標準形とよばれているものであって意味深いものである。回路素子モデルの拡大に対応して、従属電源素子（能動回路の基本素子）などを含む線形回路の状態方程式の導出、可解性などの研究を行っているが、更に、より広いダイナミカル・システムを対象とすること、非線形回路（システム）との関連で、より実際のな接近法を見出すことに努めている。回路（システム）を計算機により数値解析を行うとき、計算時間、計算誤差に関連して、回路素子の特性と回路の構造（接続状態）との関係を明らかにすることが望ましい。これらの問題に対し、行列の変換理論（初等変換、枢軸変換、相似変換）、グラフ理論の回路的側面（グラフ分割、二グラフ法など）を応用した研究を行っている。

二、グラフ理論とその応用

グラフはシステムの構造が離散的なるとき、その表現に用いられる。このとき、システムの諸概念がグラフの基本的な諸概念の具体的な実現になっている場合が多い。上述した電気回路に対する応用以外に、グラフは通信・情報網、交通・輸送網、生産・管理システムなどシステムの構造（構成

素子と全体との関係を明らかにするためのモデルとなるため、システムの解析、合成、診断、制御の基礎的問題の解決に有用であると考えられる。グラフにおける問題は非数値的で、組合せ論的な性格をもつものが多いので、特に効率のよいアルゴリズム、近似的、発見的なアルゴリズムの開発が重要となる。新しい概念とその性質（極大共通木、ゲージなど）、グラフ・アルゴリズム（サブルーチン・パッケージ、同型判定など）の研究を行っている。

三、ラプラス変換の応用

ラプラス変換は、実用上、最も重要な線形回路（システム）に対して有力な解析手段を与えるが、線路における進行波の伝播特性（大地の影響を考えた）の場合のように実際に近い問題に対しては、逆変換が非常に困難、あるいは不可能になる場合が多い。数値的な逆ラプラス変換法として直交関数を用いた方法などの研究がされているが、本講座では、伝送特性の理論的取扱いにフーリエ積分（周波数特性）が有効な手段を提供すること、高速フーリエ変換が適用できることを考慮して、複素フーリエ変換の内容をもつ数値逆変換のアルゴリズムの開発とその応用の研究を行っている。線形回路（集中常数、分布常数）に対し

ては、工学的に考えて問題点は少ないが、より広い回路、システムへの適用をめざし、現在、ある種の非線形システム（解析システム）への適用を検討している。

四、回路における非線形振動

回路（システム）の大域的特性を問題とするとき線形理論は無効となる。電気、電子工学は技術の進歩とともに、非線形回路、システムに発生する振動現象が問題となる場合が多くなり、定性的解析だけでなく、定量的解析が望まれている。また工学（社会）システム、生物システムとの関連で、多次元化（多自由度化）、一般化が望まれているが至難の問題であると思われる。本講座で現在取扱っている研究は、実際の非線形素子特性の表現（折線近似など）を用いた解析（摂動法、漸近法）アルゴリズムの開発と多自由度の非線形回路のモデルとしての三相回路における非線形振動である。非線形回路、システムでは数理モデルの作成が本質的に重要であるから、回路技術などの進展に対応して研究を進めたい。

てゆきいと念願している。何卒、洛友会会員諸兄の御鞭撻と御支援をお願い致します。（木嶋昭記）

同窓会記事

昭六会

四十八周年同窓会

今年度は東京担当で時季を早めて六月初の大島・伊豆旅行とは相成った。同行の宇野君作のメイ短歌を随所に入れて情景をお伝えしたい。同君は「迷」と云い、筆者は「名」と思うのだが、それは読者の判断にお任せしたい。

六月一日（金） 晴

熱海駅十四時集合ということで十三時半に着けば柳父君が待合室に立っている。次々に友来り遠く広島より添田君が股りに駆け付ける。車に分乗して東海汽船の大島行ふ頭に向う。こゝで記念撮影をして高速艇に乗り込み十五時出帆。

高速豪華密閉型客船シーホーク観光はあとでとばかり唯ひた走る

空には雲なく海は青く絶好の天氣に恵まれ快的なり。十六時過岡田港に着き出迎えるバスにて小淵園に至る。早速温泉にとび込み浮

世の垢を落す。小部屋にて開宴。大谷・柳父両夫人を入れて総勢十二名。富士急の後藤君も加わり歌も出て賑やかであったが酒量は前回に比べて一段と減った。廿一時散会。基好きは同窓室にて夜半まで打ったようだ。

六月二日（土） 晴

今朝もよい天気だ。竜舌蘭が海を背にして長い花梗を伸ばしている。朝食は和食バイキング。

おつゆにサラダに煮豆でも頑張らましよう今日のため九時過遊覧バスにて宿を出る。

ガイドの説明によると大島の大きさは淡路島の四分の一で人口は一万二千人とのこと。椿トンネルを潜り抜けて十時前自然公園に着く。動物園にてらくだ・だ鳥等大急ぎで見ると。十時半こゝを立ち波浮港へ向う。途中島の周辺を巡る道路の最高点（三六三米）より眺めると伊豆五島眼下に見えて絵のようだ。路傍には桜草が紅白の可憐な花をつけている。十一時過波浮港へ着く。野口雨情作詞、中山晋平作曲の歌を背中に聞きつつ皆土産品を買う。

バス降りて暫し見廻る波浮の茶屋

椿油にこけしくし皿

こゝを後にして歌の茶屋という所で中食をとる。ビールも冷えておいしい。こゝを立ち「わたしや

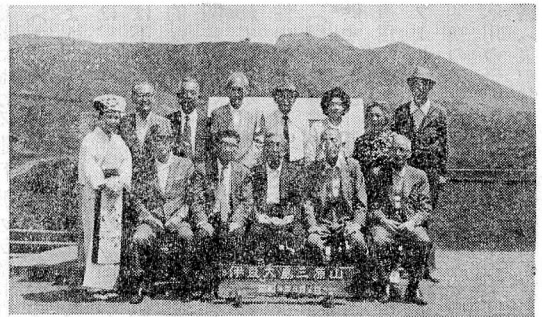
大島御神火そだち、胸にや煙はたえやせぬ」と唄われる三原山麓へ到着。添田君は居残り溝口君は頭張り十三時半七五五米の山頂を目指して登り始める。

うぐいすの声しきりなり三原山噴煙の出る頂上よりの眺望は見はるかす伊豆の山々千葉の浜小さき人の営み見えず空青く風爽かな三原山

登り一時間下り二〇分十五時過再び車中の人となり棒の防風林を抜けて州分元町港へ行く。棒は全島で一五〇万本あるそうだが、季節外れでその美しい花を見ること不叶残念であった。

一六時二〇分高速船にて大島を後にする。往路より波は静かだ。五十分余にて伊豆の稲取港に降り立つ。バスにて海浜の稲取温泉銀水荘に着く。伊藤君が大阪より先着しており、挨拶も早々に入湯。浴場は広く眺めもよい。野天風呂もある。十八時半より我々の部屋で宴始まる。新顔が加ったので昨夜より賑かだ。初めに伊藤君よりスリーマイル島の原発事故の話を聞き質疑応答が始まる。大島もそうであったがこゝも魚は新しくおいしい。

豪華料理腹に聞いて、食む程にえびに天ぷらさしみ残りぬ昨日からの疲れで酒も歌も氣勢あがらず。廿一時半部屋に引揚げ二



日目の夜は更ける。

六月三日(日) 晴

湖騒の音で五時過覚める。暫くして入湯するも人影なし。録水荘混浴ときく大浴場

その影もなし大いに洗う所へ五人の天女が出現したので早々に退散する。朝食を楽しく賑かに済ませて九時富士急バスにて出発。道路はくずれた箇所あり、先般の地震の傷痕が生々しい。十時半浄運の滝に着く。石段の細い険しい路を下って行けばワサビ田もあり、やがて堂々たる滝の前に出る。昔失恋の女性が身を投じ土蜘蛛に変わって棲んだと伝える。十一時過逆戻りしてイノシン村の猪苑に着く。猪の見るが「は

ち」の失敗に芸さぼり餌だけねだる度毎に

客は喜びどよめき渡る猪村ドライブインで猪鍋をつく。臭味もなく軽くておいしい。牛鶏と異る味のししの肉

ハラ押えつゝ歯触り確かむ汽車の都合で先に帰る添田君をバス停まで送る。我々も十三時出発して北上する。山と木立の連続であるが、十四時達摩山キャンプ場に着く。この山は九八二米と伊豆では一番高い。キャンプ場からの眺めは素晴らしい。沼津越しに富士の霊峰が見える筈だが曇り見えず残念だ。

駿河湾沼津の街や淡島と絵の如く展開すレストハウス

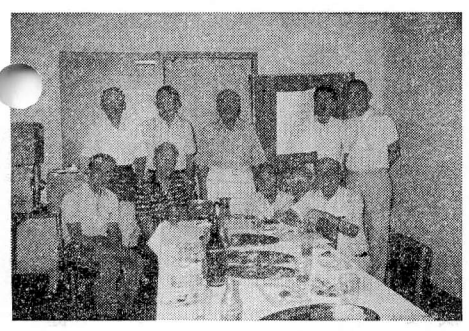
の丘十四時こゝを後にして二十分修善寺に着く。薄命な頼家の後を引う。ついで葦山に至り反射炉や江川太郎佐衛門邸を見物し先人の辛苦を偲ぶ。

修善寺の山門くより人粗なる古き時代の物語思ふこゝでわらかけ茶を買ったが美味なり。再び三十分車中の人となり三島嶽に着く。十六時過来年の再会を約して解散し東西に袂を分つ。年老いてうたを詠まんと思いきりこれがうたかと笑い給うな

なお五十六年は五十周年であるが京都で開くことにして来年は東京で引き続き担当することになったことを付記する。

昭大 大島 伊豆 行
S.S.K. 6. 1-23
伊藤 俊 野 誠 三
大谷 柳 飯 藤 溝 西
福 檀 野 本
日 日 日
日 日 日

参加者
大谷、柳父(以上夫人同伴) 伊藤、飯田、宇野、添田、西本、野際、福間、檀田、溝口(十三名) (福間記)

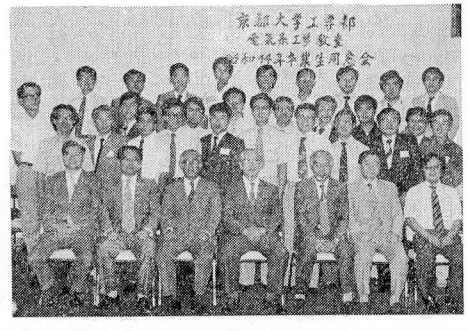


昭17洛友ゴルフ会
写真は去る八月四日、富士ヘル

スカントリークラブでの夏の例会のパーティで撮ったものです。今回参加者は10名、関東地区在住でクラブを握る人は約20名近く居り毎回半数以上の方々に参加されます。年に3〜4回やって居ますが参加者の面々は年を忘れ腰の痛み、肩こりを克服して喜々としてプレイを楽しんでいます。段々選歴をむかえるメンバーが開始した。我々は健康のため、親睦のため、この会を長く続けてゆきたいと思っています。(木村)

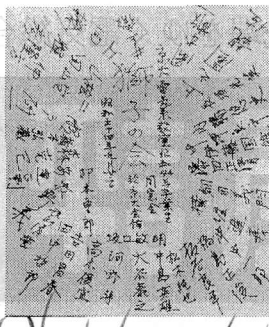
昭和44年卒業生 同窓会報告

昭和44年学部卒業生は、昭和46年修士修了者とともに、卒業10年目を機会に、去る9月22日(土)谷に京大大会館に集まり、在学中に



お世話になった大谷先生、田中先生、上之園先生、高木先生、卯本先生、板谷先生の6人の恩師と久し振りに歓談し、また同期生相互の旧交をあたためました。また、これからも定期的に集まることを約しました。

席上、この会の名前を付けようということになり、出席者多数の賛同を得て、卒業年の昭和44年に因み、「獅子の会」と決定しました。百獣の王ライオンとはあまりに欲張り過ぎではないかという声もありましたが、この名前に落ち着きました。



先輩各位の今後一層の御指導を仰ぎ、この会の名に恥じないよう、同期生一同努力いたしたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

洛友会々費納入のお願い

昭和53年度会費未納の方には納入請求の印を押して会報と共に

送り致しますのにかに御払込み下さい。

昭和54年度の会費も早い目にお払い込み願います。

会費は本会存続の鍵ですから納入率向上には各位の御協力を切にお願い申し上げます。

計報

明45年	古田 正康	52.11.2
大12年	中島省三郎	53.2.23
昭7年	吉田 博	54.9.7
昭9年	尾崎 完	54
昭11年	船谷 辰男	54.10.28
昭11年	福光 勉	54.10.13
昭16年	柳沢 忠男	54.10.9
昭16年	藤田 和也	54.11.7
昭17年	豊田 茂雄	54.9.20
昭23年	清水 尚之	54
昭26年	森本 俊三	54.9.1
昭30年	西川 芳邦	54.10.13
大5年	原 忠雄	53.8.3
大5年	山路 昇	54
大6年	福波小三郎	51.11.6
昭3年	吉田 照治	53.4.28
昭8年	林田 重治	54.9.2

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

洛友会(同窓会)の歌 松田長三郎 作詞作曲

- (1) 古き都に幾歳をととに学びし同窓の
今日なつかしきこの集い 青春の日はよみかえり
- (2) 心はずみて学び舎の 朋をめぐりし若き日の
夢多かりし 明暮は 希望に燃ゆる日とを
- (3) 世に出でしより年と経ぬ 思いはめぐるありふしに
まふたにほふ師や友の 声と聲もなつかしや
- (4) 名残はつきいさらは友 進み行く世に新らしき
校舎を樹つべくもちまた 会う日まで強くまな

電気工学界の先端をゆく電気総合雑誌

月刊

電気評論

毎月
10日発売

各界の権威を網羅した編集委員会責任編集の下、電力技術を中心にして広く電気技術全般にわたり平易に解説した技術革新時代にふさわしい月刊誌。毎月焦点をしばった新しい技術問題を捕えた特集記事のほか、論文・トピックの解説・講座・海外文献などを掲載しています。

2月号・特集・昭和54年・電力技術革新のあゆみ（第二集）

- 1. 電子技術総合研究所における技術開発……………電子技術総合研究所 等々力 達
- 2. 電力中央研究所における研究開発……………電力中央研究所 尾出 和也
- 3. 日本原子力研究所における技術開発……………日本原子力研究所 鋸 鋼 太郎
- 4. 動力炉核燃料開発事業団における技術開発……………動・燃開発事業団 富士原 智
- 5. 海外主要国の電気事業の近況……………海外電力調査会 上 島 定 雄

3月号・特集・基礎

「それは考え方の基礎だ」「基礎的事項」などと人々は言う。しかしその「基礎」なるものがよく分かっていないことが先日のロスアンゼルス地震で発見され、仙台地震で実証された。これらの事実を立て目下、世界をあげて見直しが行われている。本号は我が国におけるその最新の成果を紹介する。

- 最近における基礎の考え方……………京大防災研究所 土 岐 憲 三
- 最近の基礎の応力解析……………電力中央研究所 西 好 一
土木技術研究所
- 地震による地盤基礎・機器の動き……………電力中央研究所 塩 見 哲
基礎を含めた機器耐震対策 土木技術研究所
- 鉄塔基礎……………東京電力 前 田 弘
- 配電柱基礎……………関西電力 吉 田 友 芳
- タンク基礎……………関西電力建設部 谷 口 八 郎

平月号・臨時号 B5判・本文 80頁・定価 550円・〒41円
1月特大号 B5判・本文 200頁・定価 1,030円・〒53円

ご購読料 { 半か年前金 (7部) 3,850円 (含臨時号)
半か年前金 (7部) 4,330円 (含特大号)
1か年前金 (13部) 7,630円 () }

—半か年以上お申込みの方には送料は当社が負担いたします—

京都市左京区田中大堰町49

株式 電気評論社

電話京都 (075) 701-2582